造泉

三月十五日　明田總藏

千柄清右衞門　伯水

〔有馬名所鑑二〕出湯を樽につめ、馬におほせて他國へつかはすを見て、

國々へ馬におほせてやる時は一もさながらにの湯にぞなる

〔温泉論四〕造泉

天下之水一也、天下之火無二致矣、況天下之金石乎、今也擧天下之火、以煙天下之水、和之以天下之金石、然而其氣味息色、確乎温湯、其才力亦髣髴乎、眞泉者名之曰家温泉、家温泉天下之一大奇貨者也、上自王公姬姜、下至鰥寡孤獨、凡懷久痾長患、不可自由者、好擧斯術、則一時縮地於千里、沸泉於咫尺、悠優閑浴、以鎔化累年之痼、猶還諸掌、然不亦痛快哉、予昔嘗入馬山、熟觀泉性、退而撰水火辨、遂及泉論、因察金石交會之理、假造温湯、歷試諸人、然後果識家温泉有裨益於世矣、則予豈敢闇然而懷之哉、向者太沖造假温泉、擬諸但馬温湯、曰温泉卽天生花、藥湯卽剪綵花、假使形似色類竟乏、天生鮮艶、況於香味乎、誠斯言也、以艸藥則似焉、苟淘汰泉石、以釀成泉性、是則人家一種温泉矣、復何香味之損、若夫所謂假温泉、用區々糯米殼、或火酒等、亦何異於世俗所用百艸湯、忍冬湯、當歸湯、枸杞子湯等哉、如是者直謂之剪綵花可也、是豈温泉間之物乎哉、欠其天性香味、固其所也、如吾家温泉、果非同日之論也、浴者其辨察之、

〔本朝醫談〕服元喬伊豫温泉碑に、神功皇后を擧たるは何に本づきしや、書紀に、温泉の事初て舒明紀に出づ、温泉は、唐土の人さしていはねど、斯邦にはもてはやす事なり、瘀血、壅滯、癥疝、痱瘙、手痹、脚痿、攣急諸病、梅瘡、下疳、便毒、痔漏、疥癬、惡瘡、撲損、閃肭、婦人腰冷、帶下等の病に浴するなり、道路の遠して行事ならぬ者の爲に、假温泉を作りて浴さする事あり、

〔近世畸人傳五〕山村通庵

山村通庵が法は、畸人傳に出せり、